様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００２１

研究課題名（和文）バイオテクノロジーの時代における技術と人間の原理論

研究課題名（英文）Human and Technology in the age of bio-sciences

研究代表者
檜垣　立哉（HIGAKI, TATSUYA）

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：７０２４２０７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、ドゥルーズやフーコーらのフランス哲学の知見を基本としながら、生命科学のもたらす現代社会や人間への見方の変遷について研究をおこなった。ほかの研究経費とあわせてのものもあるが、フランスでの研究交流、アメリカ、ドイツ、台湾やポルトガルでの学会発表、日本の学術誌への投稿などを含め、さまざまな機会を利用して発表をおこなうことができた。そのおおきな成果は岩波書店から刊行されている雑誌『思想』の２０１２年２月号「生権力論とは何か」などにみることができる。

研究成果の概要（英文）：In this project, we tried to search the modification of human beings and human culture in the age when the bio-sciences give the many effects. We presented our research's result in the academic exchange with the university in France, and in many conferences or meetings in Germany, USA,Taiwan and Portugal. And we also presented many papers in some journals in English and in French as well as in Japanese. The most important fruit of this project is published in the journal 'Shoso' Iwanami publishers, special issue for the bio-power, in Feb.2014.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：生命論　哲学　現代思想　システム論　フーコー　ドゥルーズ　技術論　バイオテクノロジー

１．研究開始当初の背景

生命科学および人間の身体やその環境との関連にかんする科学、さらにその技術の進展は非常に大きな展開をみせつつある。人間とは何か、人間にとっての倫理とは何かを考える哲学・現代思想や人類学の研究も、現状においてこうした科学技術の進展を無視して展開することはできない。もちろんのことながら近代的理念として形成されてきた「人間」なるものの像が多方面から崩れてきていることは人文科学の領域においてさまざまに述べられていることではある。しかし二一世紀における生命科学技術の展開は、こうした人間というものの原理的な思考を根底から覆し、あらたな方向にもっていく意味をもっているとおもわれる。本研究は、これに先だって推進されている大阪大学独自の学内研究を引き継ぎつつ、哲学および人類学の領域から、上記の研究を進めるために考案された。

２．研究の目的

当該の研究にかんしては、哲学の領域においては七〇年代以降のミシェル・フーコーの生権力論・生政治学理論の展開という哲学にける大きな流れがある。またこれとは別の方向から、英米哲学においても、人類学においても生命科学技術と人間との関連について、たんに既存の人間の姿を守るのではなく、新たな環境に適応した人間という存在の仕方をめぐる研究はつづいている。本研究は、フランス系哲学、英米系哲学、人類学とりわけ科学人類学という、それぞれの分野で相互に影響を与えながらも別個に展開されてきた事態を一望のもとに収めることで、人文科学研究をあらたな方向に推し進めることが目的である。

檜垣は哲学が専門であるが、山崎が医療人類学や科学人類学の立場にたっているため、人文科学にありがちな書物型ではない、現場のフォールドとも交錯させた研究を進めることももう一つのもくろみとしている。

３．研究の方法

１）まずは、人文科学研究であることを土台に、同種の問題を考える際にきわめて重要な論点を提示したフーコーの生政治の議論と、その現在的な継承の諸相を検討することがなされた。その際には、フーコーの生権力論にかんする、刊行中の講義録や二次文献の検討はもとより、アガンベンやネグリなどイタリア系の思想家、あるいはニコラス・ローズなど英米系の思想家も含むさまざまな展開のあり方を辿ることが必要であった。同時に人類学や社会学など哲学思想の領域に止まらない多くの文献を検討し、生権力論の現在の拡がりのあり方を確認しつつ、目的にいたるべく研究をおこなった。

２）本科研だけではないが、本科研と関連するさまざまな企画との共催で、招聘をおこなった。昨年度はロンドンのキングスカレッジへのニコラス・ローズへの訪問と、ニコラス・ローズ自身の大阪への訪問、大阪大学での講演などをつうじてさまざまな対話を深めた。またその前年には、やはり本研究と関連が深いブラジルの人類学者ヴィヴェイロス・デ・カストロを訪問しインタビューなどをおこなっている。これらにより、本科研以降も、さまざまなグローバルな研究連携の構築がなされている。

３）同時に、現在の日本における生命倫理や医療倫理の問題、あるいはそのフィールドのあり方などにかんする、フィールド的な研究も伴うさまざまな検討が、共同研究者である山崎が中心になってなされた。こうした方向性は、哲学思想的な研究だけではもちえない現状への視線を、研究そのものに入れ込める仕組みとして非常に重要なものであるとおもわれた。

４．研究成果

１）人文科学研究であるということもあり、基本的な研究成果は、論文、著作および発表によって行われている。

檜垣はとりわけ２０１１年度に著作『ヴィータ・テクニカ　生命と技術の哲学』（青土社）を刊行し、哲学の原理的方面からの生命科学の時代における技術的な人間の位相の捉え直しをおこなった。そこでは、現代思想のある種の流れが、生命論的な主張と、そうした主張にダイレクトに連関する生命技術の交錯においてみいだされることを明示し、来るべき時代における生命論のあり方を新しくとらえなおすことを提唱した。その後半ではフーコーやハイデガーの技術論や、その日本における哲学的な影響、最終的には環境性の議論にいたるまでの展開を展望し、技術という主題がおおきな枠組みを占める現代哲学の諸相についても描きだしている。

また２０１２年度には『子供の哲学　産まれるものとしての身体』（講談社メチエ）を刊行し、生殖という、現在の生命科学にとって重要な事態を、とりわけ生命的な身体の産出という側面にしぼって哲学的に考察した。そこにおいては生命技術や生命の倫理がダイレクトな主題としてとりあげられているわけではないが、それを考察する基底としての生殖という事態にかんする哲学的省察を全面にひきたてた。従来の意識を中心とした近代哲学がなおざりにしてきた身体とその形成という事態を、自己という存在者を考えるときの基本として設定しなおすことがそれにより試みられており、一種の生命的身体として提示される人間の姿について検討しなおされた。

このほかにも檜垣はこの科研費の期間中に、野間俊一・木村敏との共著となる著作、檜垣が中心になって推進している大阪大学の研究組織の論考集の編著、クィア論の論客

として有名なレオ・ベルサーニの翻訳などをおこなった。さらに期間中には刊行にいたれなかったが、上述したニコラス・ローズ、ヴィヴェイロス・デ・カストロの主著といえるべき著作を、本科研費の共同研究者である山崎の含む院生やＰＤのメンバーたちと翻訳を試みており、早い段階において公刊することを目指している。こうした科研のテーマにかかわる海外文献の紹介翻訳も、人文科学においては重要なテーマであるとおもわれる。

またいくつかの論文において、本科研と関連のあるテーマを発表しているが、もっとも重要であるのは、２０１３年２月号の『思想』岩波書店、特集号「来るべき生権力論のために」である。檜垣はその企画構成に関与し、鼎談、論文、翻訳などをおこなった。この特集においては、まさに人類学や社会学と交錯する領域にある局面を、さまざまな海外動向とともに紹介し、本科研研究のおおきな成果としての意味も持ち得たと考えている。

またこの間に、Deleuze Studies や、Annales Bergsoniennnes における英語やフランス語の論文も刊行し、国際的な発信もおこなっている。

また山崎はおもに臓器移植とそのエコノミーかんする論文を発表し、生命論と人類学的贈与の問題についてさまざまな媒体で成果を発表している。

２）上記と平行して当該主題にかんする国際発表もさまざまな資金と共同しながらおこなっている。檜垣は、２０１２年度と２０１３年度の Deleuze Studies Conference，２０１３年度にパリにおいておこなわれたベルクソンにかんする会合などにおいて英語およぶフランス語において発表をおこなった。また２０１２年度には、ドイツのビールフェルト大学と大阪大学との共同シンポジウムをドイツにおいて開催し、ロボットを中心とするテクノロジーと人間の本性を巡る関係について、共同研究者山崎もともに参加するかたちで企画立案および実施をおこなった。こうしたかたちでの海外発信は本科研費の重要な成果であると考えられるものである。

３）とりわけ山崎は、臓器移植を中心とした医療というフィールドにおいて、さまざまな実践的な研究を実施し、とりわけ患者団体の聞き取り、それを取り巻くさまざまな社会的組織、そして臓器移植にかかわる諸個人への調査をおこなうことによって、人類学的な側面から技術と人間との関連についての考察を深め、いくつかの論文において発表している。本科研費の期間中には刊行できなかったが、山崎は以上の成果を書籍のかたちにまとめ本年度中に公刊し、その成果を世に問う予定になっている。

４）以上の研究において、ある程度明確にしえたことは以下の諸点である。

・人間とは何かという哲学思想に固有な問いは、技術と対置するものではなく、技術自身が進化的な生物としての人間のそなえているひとつの本性であること。

・ 近代科学技術がその特殊性において反人間的な部分をもつことは明らかであるとしても、その近代科学が人間であることのひとつの頂点であるとすれば、それをとりこみつつ、さらにその先にある脱科学的な問いをたてる必要があるということ。
・ 近代科学のなかでも二一世紀において際だつものは生命科学の問いであり、これは人間がもつ身体について、従来とは別の方向から光を当て、また身体性を中心とした思考を作り直すことが可能になるということ。
・ そうした問いかけは必然的に人類学や社会学など人間の組織総体に対する自己反省的な問いをなげかけるということ。そして人間社会の今後を考えるときに科学技術のもつ危険性を重々承知しながらも、人間のひとつの本性としての科学技術という位相を、そもそも社会的・倫理的な側面に原理的にかかわる仕方でとらえなおしていく必要があること。
・ 従来の社会運動がもっていた科学や技術への戦略の意味を評価しつつも、生命科学がかくも進歩を遂げた現在において、それをどのように別の仕方で提示できるのかが今後の課題であり、このためには自然科学と人文科学との本質的な協同が不可欠になるとおもわれること。

これらである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３０件）

Tatsuya HIGAKI, *Deleuze and Kuki*, Deleuze Studies, 2014-1, 94-110, 2014 年 01 月

檜垣立哉,「バロックの哲学　序章」,『思想』岩波書店, １０７０巻　７−２４, 2013 年 06 月

HIGAKI,Tatsuya , *Le problème de la technologie chez Bergson : Qu'est-ce que la technè de la vie ?*, Annales bergsoniennes, VI, Press Universitaire de France, 2013 年 03 月

檜垣立哉,「人間と動物の閾　ジョルジョ・アガンベンにおける生の概念」,『思想』岩波書店, １０６６号 150-168, 2013 年 02 月

檜垣立哉,「単独的なものの様相　偶然性・一回性・反復性」,『哲学』日本哲学会編, 2012 年 04 月

檜垣立哉,「逆向き幽霊としての子供」,『現代思想』青土社, 147-157, 2012 年 02 月

檜垣立哉,「「種の論理」における「種」とは何か」,『思想』岩波書店, １０５３号 246-260, 2012 年 01 月

檜垣立哉,「ドゥルーズにおけるヒューム経験の超出と想像力＝構想力の役割」,『思想』岩波書店, １０５２号　p181-194, 2011 年 12 月
Goro YAMAZAKI, "Affect and the Economy of Organs," in Gergely Mohácsi (ed.) Ecologies of Care: Innovations through Technologies, Collectives and the Senses(Readings in Multicultural Innovation Volume 4), Osaka: Doctoral Program for Multicultural Innovation, pp. 31-41. 2014.
Goro YAMAZAKI, "From cure to governance: the biopolitical scene after the brain death controversy in Japan," East Asian cience, echnology and ociety: An International Journal, 7(2): 243-259. 2013.
山崎吾郎、「臓器提供に現われる身体と人格: 生経済における贈与論のために」『文化人類学』76(3): 308-329. 2011.
山崎吾郎,「脳死の経験とその正当性」、春日直樹編『現実批判の人類学:新世代のエスノグラフィ へ』世界思想社、pp. 141-160. 2011

〔学会発表〕（計 9　件）
檜垣立哉、「デリダの動物論」日仏哲学会、2014 年 3 月
HIGAKI, Tatsuya, Face as betweenness of Body and World, Deleuze Stuides Conference in Lisbon 2013,7
HIGAKI, Tatsuya, Deleuze's strange affinity with Kyoto School, Deleuze Studies in Asia Conference in Taiwan 2013,6

〔図書〕（計８件　単著は２件、編著２件、共著４件）
檜垣立哉『子供の哲学　産まれるものとしての身体』, 講談社, 2012 年 11 月、２１９頁
檜垣立哉,『ヴィータ・テクニカ　生命と技術の哲学』, 青土社, 2012 年 03 月、４８６頁
檜垣立哉編　『ロボット・身体・テクノロジー』, 大阪大学出版会　2013 年 3 月
檜垣立哉編,『生命と倫理の原理論』, 大阪大学出版会, 2012 年 03 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）
なし
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）
なし
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
檜垣立哉（HIGAKI TATSUYA）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：７０２４２０７１

(2)研究分担者
山崎吾郎（YAMAZAKI GORO）
大阪大学・人間科学研究科・研究員

研究者番号：２０５８３９９１

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：